

## たかやんの16年間 (2004~)

16年前は加藤文保・田中幸弘・羽根よしやす・平松大佑と「刷新の会」に所属し、議員人生がはじまりました。加藤文保、田中幸弘という二人の先輩議員に魅力を感じたことが「刷新の会」に入った理由でした。しかし、文教委員会に入り、当時の須田市長・臼倉教育長の教育政策と真向からぶつかりました。「刷新の会」は市長与党でしたので、僕一人は委員会で反対、本会議では退席という悩ましい状態が続きました。市長与党でしたので、執行部から討論用の原稿が来たりもしましたが、幹事長の文さんが「自分の言葉で討論するから、そんなものは捨ててしまえ!」ときっぱり。議会で自分の言葉で討論することの重要性を教えて貰いました。2006年『一人でやりたいのですが・・・』と申し出て、「たかやんなら大丈夫」と快く送り出して貰い「語る会」をつくりました。一人会派でしたので、苦しいこともありましたが、自分一人の頭で考える習慣がつき、駅立ちもするようになりました。

「語る会」は2012年まで続きました。6年間の一人会派を経て、木村俊彦、立川あすか、塩田和久という仲間と出会い、「市民と語る会」を結成しました。途中、色々なことがありましたが、2016年からは木村俊彦と二人だけで「市民と語る会」をつづけ今に至っています。2011年の9月から「市の広報の全戸配布」を訴え続け、収支報告書を調べ上げることで「町内会世帯数水増し疑惑」を議会でぶつけ続け、2016年の「全戸配布」に踏み切らせました。「たかやんの応援団」で検索すると見ることができますよ。写真は相棒の俊さんと・・・。



2020年2月1日発行



「たかやん塾」に通ってくれていたこの子達も、もう中学生です。世界の190か国以上の名前と位置をパツと覚えてしまうのですから凄いですよね。

## たかやんのプロフィール



1954年、港区青山生まれ。  
本名 たかむらともや  
新宿百人町では「超ワルがき」で有名な子だった。勉強も全くできなくて、人前で話すことと作文が苦手だった。

西戸山中学1年の3学期からテニスをはじめ新宿区で優勝。「西戸山の天才」と呼ばれ、複数の私立高から誘われ調子に乗る。石神井高、北大でもテニスだけに燃える。

大学3年の冬、新聞記事を読んで、突然「教師」を目指しはじめる。昭和52年4月新設校新座五中に赴任。五中・六中・二中で21年間担任を続け、理科・数学・国語・英語・体育などを教える。

現在は石神で個別・集団対応の「たかやん塾」で中高生と一緒に学んでいる。

「森友」「加計」「さくら」「辺野古」「IR」「日米FTA」「消費税」「国の借金」「中東派遣」「憲法改正」

嘘で塗り固められた自民党独裁政治が続いている中、安倍自民と真っ向勝負しようとしている令和新選組の山本太郎を勝手に応援している。

写真は陸上指導のスペシャリスト、元立教新座高校の渡辺隆洋先生と新座駅でのツーショット。

## 🍷 タカヤンの10年間（1977年～）

大学を卒業して直ぐに新設校の新座五中で3年4組を担当します。当時は新任が担任をすることすら稀な時代でしたので、これはもう誰もがぶっ飛ぶような人事でした。新座中と三中が合わさってできた学校でしたので、先輩達も担任を嫌がったのです。信じられないことに、2年生の理科も教えることになり、週23時間＋テニス部の顧問という厳しい1年で僕の教師生活はスタートしたのです。

校内暴力が吹き荒れる時代でしたが、神宮司久子、甲神岳という2人の先輩と一瀬猛彦という1人の生徒との出会いが僕の運命を変えていきます。教師としては全く無力でしたので、無我夢中で子ども達と一緒に学ぶだけしかできなかった1年間でした。しかし、その1年間を乗り切ったことで、その後の五中での9年間は実に楽しいものになりました。余りにも楽しいので、2年目から「一生懸命」という学級通信を書きはじめます。毎日書くことはできませんでしたが、年間100号以上は書くようになりました。最初の5年間は軟式テニス部の顧問だったのですが、子ども達とサッカーばかりやっていたので、テニス部の子達が心配して、「明日から硬式テニスをやります」と言ってきました。その日から、僕の生活は一変します。勿論、一番大切にしていたのは「授業」そして、次は「クラス」だったのですが、それに「テニス」が加わったのです。当時の五中は埼玉県でトップクラスの学力を誇っていましたが、岳さんの剣道部をはじめ、部活動も燃えていました。突然「日本一を目指すぞ！」と生まれて初めてラケットの握った子達に宣言したのですから滅茶苦茶です。授業、クラス担任を真剣にやった上で「日本一」を目指したので、月に200時間以上の残業がその後15年以上続きました。



## 🍷 タカヤンの13年間（1987年～）

五中から六中に驚いたのは子ども達が着ていたジャージが赤・青・緑の3色に分かれていたことと、**全校生が同じ通学靴**を履いていたことでした。

僕が最初に手を付けたことは上下関係の無い硬式テニス部を作ることと、子ども達の足に合った通学靴を履かせることでした。それは奇抜な作戦で半年で達成します。「明日からテニスシューズで登校しろ！」という指令を113名のテニス部員に出したのです。子ども達は喜んで僕の指令に従いました。それを見た他の部活の上級生も真似をして、先生達は注意することもできなくなりました。六中の通学靴はそうやって自由になったのです。その後、テニス部は関東大会で3回、全国大会で2回優勝します。彼らは学年関係なくテニスをやりながら、毎日六中の周りのゴミ拾いを続けました。テニス部は地域の方達に愛される部活になりました。管理的で息が詰まりそうだった六中は五中のような自由な校風になっていきました。

10年後二中に異動して「**生徒と仲良くするな**」という管理職の言葉にショックを受けました。朝、「**号令**」がかからないと挨拶が出来ない子ども達、「**内申**」を気にして手を挙げる子ども達に驚きました。

二中で最初にしたことは、理科準備室の整備。ソファーと漫画とギターを置いて「いつでも誰でもおいで」「テストで90点以上取ったら、何をしても5をあげるよ」と五中・六中で言い続けてきたことを子ども達に伝えました。3年2組では朝勉を開始。「他のクラスと歩調を合わせろ」という言葉を無視した1年間がはじまりました。しかし、「**同一歩調**」「**統一行動**」という二中の言葉が嫌で嫌で僕は**子ども達と一緒に学校を去ることを決意**したのです。

二中の子ども達は最高でした。たった1年だったけど、ずっと一緒に過ごした仲間のような、そんな宝物のような時間を僕は最後に持つことができました。学校を辞めた後は、カナダやアメリカに行ったり、うどん屋と塾を同時にはじめたり、教師時代にやりたかったことをやり始めます。そして……

2000年、市議会議員に立候補。選挙カー無し、公選葉書なし、駅立ちなし、コピー用紙ポスターの9768円で戦い、24票差で落選したのです。

左は全中に行った五中8期生テニス部の子達。

